フィンランドのメンタルヘルスを眺めつつ、日本にある「たきび」を囲む場

看護師　難波純

スライド、多くの写真をありがとうございます。
ちょうど講座の翌日、職場の人達と飲み会？があり、映してくださった写真やこの講座の話を共有しました。
響子さんのオープンダイアローグとの出会いも病棟飲み会、さまざまな出会いの不思議さを感じ、それらの機会を捕まえて実践してこられた姿を示してくださったことに感謝しています。

この講義の時間、そして、「放課後」は、改めてさまざまな人とのつながり、ネットワーク、えにしに、思いを馳せた時間でした。

ご勤務の大学での、当事者の方と学生さんの6年間の協働授業、「オープンダイアローグ学習会 in 奈良」の8年間、信頼できる仲間と知り合い、時間を重ねてこられた中で、つのってきた思いが一般社団法人 kokko 奈良クライシスセンターの実現につながっていかれたように受け取りました。
kokko とはフィンランド語で「たきび」だと、その響きの優しさと意味にも惹かれます。

フィンランドのお話を聞いている中では、「すべての人に」、「個別に」といった言葉が私には浮かんでいました。
メンタルヘルスフィンランドの 3000 人のボランティアという数にも圧倒されます。
利用者負担のないサービス、ボランティアをサポートする仕組みが重要なことも感じました。
クライシスセンターは、話を聞くだけの場でもなく、課題解決の場、答えを出す場でもなく、対話をつなげていく場、6 割くらいの人は話す中でこたえが見つかるといったお話。

それがふさわしく、必要であれば、もちろん課題解決に尽力したり、情報提供や紹介なども行われる場でありながら、それを目的としない、そのような場に奈良クライシスセンターがなっていく未来を思います。
「問題」として分類して対応したり、医療化したりするのではなく、話にこられた方が「おかげさまで助かりました」とすら思わない、自分が動いたことで自身で助かったと自分自身の自信につながっていくような成り行きなるようにも感じました。

「当事者と学生の協働授業」、「丸ごときく」と話されていて、病気を教えるのではなく、看護過程の展開でもなく、看護の授業にとどまらない、今後学生さんが生きていく上でのリソースにつながる時間になっているように思いました。当事者の方にとっても充実した時間となっていき、このことに関わったすべての人々に波及していくような流れを感じました。また、授業の前にセルフケアを学ぶなど、フィンランドで行われているメンタルヘルス教材での教育につながるようなことが行われ、学生さんが安心して協働に臨めるよう配慮されていることが多くあるのだろうと感じました。

このお話から自分の学生時代の精神看護の講義・演習の体験も思い起こしていました。
その体験は、目から鱗、自分を知る、自分の感情に触れる、人と自分は違う、話してみなければわからないということを実感する衝撃を伴ったものでした。
響子さんの授業に触れた学生さん達のみならず関わったすべての方々に何かそのような響き合いがあったのではないかと想像しています。

響子さんの柔らかなたたずまい、その歩みに魅了され、看護に向かわれたのは、どういったことであったのか、またお目にかかって話すことができる日を楽しみにしています。